

学校の共通目標

授業作り	重点	・どの教科においても、一単位時間の「学習の流れ」を提示し、見通しをもって学習に取り組めるようにする。	中間評価	・個に応じた指導の視点で授業をおこなう教科が増えた。	最終評価	・各教科工夫して取り組んできたが、学力調査等のポイントに反映されていない部分が多い。
		・ICT機器を効果的に活用する。		・タブレット端末を用いた授業や、家庭学習としての課題を提示する教科が増えた。		・3学期の分散登校時に、工夫してタブレット端末を用いた授業展開ができた。

教科の取組内容

教科	学習状況の分析（4月）	課題（4月）	改善のための取組（4月）	中間評価・追加する取組（10月）	最終評価（2月）
国語	<p>調 正答率は第2学年で6.4ポイント、第3学年で7ポイント、全国を下回っている。特に、〔領域〕「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」において、全国平均を大きく下回っている。設問別に見ると「漢字を読む・書く」「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す」といった内容の正答率が低かった。正答率80%以上の生徒の割合は第2学年で45%、第3学年で40.2%である。一方、正答率50%未満の生徒の割合は第2学年で25.5%、第3学年で25.2%である。また、四分位分布を見ると、D層の割合が最も高く、第2学年で34.7%である。学力下位層の底上げを図っていく必要がある。</p> <p>学 日本語の習得、漢字の習得が十分でない生徒が多い。</p> <p>ワークやテストから、文章や問題文の意味を正確に理解することに課題が見られる。</p> <p>いずれの学年も、与えられたテーマに沿ってまとめた量の文章を書くことに苦手意識をもつ生徒が多い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な漢字の読み書きを習得させる必要がある。 ・理解語彙を増やすとともに、使用語彙を増やすよう指導していく必要がある。 ・基本的な文法について、既習事項を定着させる必要がある。 <p>・論理的に文章を読む力を付けさせる必要がある。</p> <p>・自分の考えをもたせ、書く習慣を付けさせる必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字学習に、特別に時間を割き、継続して取り組ませる。級別漢字練習プリントを用意し、各自のペースで取り組めるようにする。放課後に補習を行ったり、長期休み明けに漢字コンテストを行ったりして、定着を図る。 ・授業クラスに人数分の辞書を持ち込み、辞書を引く習慣をつけさせる。社会的事象や文化史の内容に関連する単元で、便覧等を適宜参照させることで、社会的・文化的背景とともに言葉を具体的に理解させる。意味調べや短文づくりの課題を家庭学習に出す。 ・フォローアップワークシート、東京ベーシック・ドリル、デジタルドリルを活用し、基本的な文法について定期的に繰り返し練習問題を解かせ、定着させる。 ・「図との対応」「接続の把握」など、読解のポイントを絞ったドリルを用い、週1~2回授業内で文章を正確に読む練習を行う。 ・物議的文章や説明的文章などの学習時に感想や考えを書かせることで、書き慣れさせる。感想・考えの交流を推し進め、書く意欲を高めさせる。150字程度の課題作文を月に1回程度実施する。 	<p>調 新宿区学力調査で、第3学年は正答率が全国平均とほぼ同程度で、3.1ポイント下回るにとどまった。観点別では「話す・聞く能力」に課題が見られた。「司会者の工夫を聞き取る」、「相手の発言を注意して聞いて自分の考えをまとめる」ための練習を重点的に行っていく。また、「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す」問題はきわめて正答率が低いため、フォローアップワークシートや東京ベーシック・ドリルなどを活用し、知識の定着を図る。</p> <p>学 辞書を教室に持ち込んでいるが、利用者はあまり増えていない。気軽に小まめに意味調べができるよう、タブレット端末の使用を奨励していく。</p> <p>ペア学習、グループ学習を適宜取り入れることで、言語活動を充実させている。発表態度の向上、協同して学ぶ力の向上が見られる。</p> <p>課題作文では、字数や段落構成への意識は高まってきたが、誤字脱字が多い上に、「自分の考えを明確にして書く」力がまだまだ弱い。帯単元で漢字・語彙の学習や推敲の練習を重ねるとともに、「考えの形成」に焦点を合わせた学習を行っていく。</p>	<p>調 第1・第2学年ともに、全国平均とほぼ同程度であり、領域「情報の扱い方に関する事項」と「読むこと」においては全国を上回った。第一学年は領域「我が国の言語文化に関する事項」に、第二学年は領域「書くこと」、観点「主体的に学習に取り組む態度」に課題が見られた。フォローアップワークシートや東京ベーシック・ドリルなどを活用し、引き続き知識の定着を図る。また、第2学年は、問題を解く際の時間に対する意識が低いため、時間内に問題を解き切るという意識を高める取り組みも進めていきたい。</p> <p>学 帯学習としてことばのテスト（漢字や、語句の意味を問う小テスト）を行うことで語彙力の強化を図った。また、課題作文に定期的に取り組み、書くことへの抵抗感は薄れつつある。人の作文の添削をする体験を通じて、作文のコツをつかむ練習も継続していく。どの学年も、基礎基本の徹底が課題である。語彙に加え、短文づくり、文法等の小テストを行うとともに、単元ごとに復習テストを行い、基礎の定着を図っていく。</p>

社会	<p>どの学年も正答率が 30%未満の生徒が、全体の 3 割程度おり、上位層をかなり上回っていて、基礎基本の定着が身に付いていない層が多い。</p> <p>第 3 学年は、「社会的な思考・判断・表現」の正答率が高いが、意欲は低い。</p> <p>第 2 学年は「資料活用の技能」の正答率が高いが、意欲は低い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> どの学年も学力下位層の底上げと習熟の程度に応じた指導が必要である。 歴史的、地理的、公民的用語や重要項目にあたる基礎の定着が必要である。 上記に関係して、問題文で何を問われているかを、読み取れていない層が多い。 資料から何が読み取れるかの、分析能力が弱いので強化する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎基本の定着を目指し、個別対応を図りながら対応する。 文章内の指示語は何を指しているのかなどを確認しながら、言語能力を上げるために、繰り返し指導していく。 社会的関心は高いが意欲が低いので、ICT 機器を効果的に活用して、視覚的に興味・関心をもたせる。また、生徒にとって身近なことを取りあげ、言葉の意味や用語の意味を理解させる。 	<p>第 3 学年で、全ての観点で全国より、10 ポイント下回った。特に「社会的事象の知識・理解と関心・意欲」が大きく下回っている。「近代の歴史」は小学校で学習してきていない項目であることが、正答率が特に低い原因となっているので、フォローアップシートや東京ベーシックドリルなどを活用していく。</p> <p>社会的事象の興味関心を引き上げるための、授業での取組が大きな課題となる。ICT を活用した視覚的な取り組みや、身近なことを取り入れる工夫を行っていく。</p> <p>基礎・基本の定着に向けた取り組みとして、デジタルドリルの活用や、ミニテストを繰り返し行っていく。</p> <p>グループ別学習やタブレット端末を利用した取組により、社会的関心の喚起や意欲の向上が見られた。</p> <p>教科書の文章の読み取りを、繰り返し行うことで、問題文を読み取る力をつけていく。</p> <p>家庭学習の一環として、デジタルドリルの宿題を定期考査前に配信している。</p>	<p>区学力調査では第 1 学年は、数ポイント下回っただけだが、第 2 学年は全ポイントで全国および区よりかなり下回っている。特に「歴史的事象の知識・理解」が大きく下回っている。</p> <p>興味や関心は高くても、それが知識や理解に繋がっていないので、教科書を読み込むこと。單元ごとに、定着確認のためのミニテストを行うこと、フォローアップシートや東京ベーシック・ドリルなどを活用して、家庭学習の時間を増やすことを来年度の課題としたい。</p> <p>家庭学習の一環として、デジタルドリルの宿題を定期考査前に配信している。基礎基本の定着に結びついていなかったため、来年度からは宿題配信だけでなく、定着確認のためのミニテストを実施していく。</p> <p>グループ学習が深い学びになるように、グループ課題の内容を工夫していく。</p> <p>教科書の文章の読み取りを、繰り返し行うことを徹底していくことで、問題文を読み取る力をつけていきたい。</p>
数学	<p>第 2・3 学年ともおおむね良好な結果である。〔領域〕第 2 学年：問題内容、領域ともに図形でのみ、目標点を下回った。第 1 学年：領域では目標値に対して図形-8.9%、関数-1.9%であった。</p> <p>いずれの学年も、数と式のポイントは平均よりも上である。基礎・基本の強化を目指した取組の成果だととらえ、今後も家庭学習の定着に向けた取組などを継続していく。</p> <p>数と式以外の領域は平均程度であったため、各分野で活用しきれていない生徒が多いと考えられる。計算処理の基本的な力を伸ばしつつ、考えを発表する活動に加えて、今年度は学びの振り返り活動に重点を置き、活用力の伸長を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習の取り組みに課題がある。 基本的な用語、計算を強化する必要がある。 既習の学習内容を用いて、自分の考えを表現する活動を増やす必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標、ポイント、まとめを示し、授業で扱う内容を厳選し、宿題をできる限り毎時間出す。その都度教員によるチェックと評価（スタンプ等）を行い、定着化を図る。 計算コンテストを長期休業の後に行うほか、定期考査では学年を超えて既習の基礎的な問題を出題する。定期考査における技能観点の達成率で全学年増加を目指す。増加率に応じて次回の目標値を決定する。 毎回の授業において、どの既習内容を用いているか確認をして進める。生徒への発問の回数を増やし、教員による解説の前に生徒が考える時間を確保できるよう、授業改善を行う。 	<p>第 3 学年で、全体の目標値より 2.3 ポイント上回っていた。問題内容別では、「データの分布」が最も低く、目標値より 7.7 ポイント下回っていた。そのため、「与えられた表や数値から必要な情報を選択する」ための練習を重点的に行っていく。</p> <p>毎授業の始めに、今まで習った内容の復習問題を行うことで、それぞれの苦手分野が分かり、基礎的な学力の向上が見受けられる。</p> <p>單元ごとにふりかえりシートを作成させ、学習内容を振り返ることで、今後の課題設定の基準が明確になり、効率的な復習に役立っている。</p>	<p>第 2 学年で、「基礎・活用」の校内正答率が区正答率に比べて、3 ポイント以上低くなっている。「基礎・活用」の活用が最も低く、6 ポイント下回っている。また、「観点」の主体的に学習に取り組む態度が最も低く、6 ポイント下回っているため、生徒が関心をもち授業に参加できるようにしていく必要がある。</p> <p>分散登校中にデジタルドリルにて課題配信を行った。生徒の進捗状況に合わせて、問題を解かせることができるため、今後も活用していき生徒の基礎・基本の定着を図っていく。</p>
理科	<p>第 2・3 学年ともに、全国の平均正答率とほぼ同程度でおおむね良好だが、第 2 学年は基礎に課題があった。四分位分布を見ると、D 層が 34%となっており、C、D 層を合わせて 55%となっている。</p> <p>第 2 学年の基礎知識の正答率の低さは、用語を答える問題で漢字を間違えるという単純なミスによるものである。基本的な知識や概念を理解しつつも、正しい語句や表現を身につけさせることを今後も重点的に行っていく。</p> <p>第 2 学年は「知識・理解」、第 3 学年は「観察・実験の技能」について課題が見られる。</p> <p>全学年ともに、記述式の解答は適切に答えられないことが多く、問題文においても説明が長く複雑になると読みとれない傾向にある。その点は新宿区学力定着度調査でも同様の傾向があるので、説明文に慣れていくように取り組ませていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 全学年とも学力下位層の底上げと習熟の程度に応じた指導が必要である。 言語の問題もあり基礎基本の定着が必要である。基本的な知識や概念を理解させると同時に、正しい語句や表現を身に付けさせる。 基本的な概念を理解はしていても、記述により説明できない点について、適切な言葉で説明する力を付ける必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 宿題でデジタルドリル等を利用して基礎の定着を図っていく。 基礎・基本の定着を目指し、單元ごとに問題演習や小テストを行う。 図や表を読み取る際に、それらを表す語句を結び付けて確実に覚えさせる。図と語句のセットで繰り返し説明し、必要な生徒には語句の練習を補習しながら、定着を図る。 実験の授業では、結果のまとめと考察を丁寧に言い、目的を明らかにしていく過程を踏まえて説明させるとともに、考察を文章で適切に表現させることを重点的に行う。 	<p>第 3 学年で、エネルギー・地球の分野で目標値を下回った。計算を伴う問題で、誤答が多くみられた。計算に苦手意識をもつ生徒が多く、簡単な問題でも式を立てられない生徒が目立つ。授業において計算に取り組む機会を多く作り、自力で解ける経験をさせることで慣れさせていく。</p> <p>デジタルドリルは、家庭学習の取組のきっかけになった。さらに、ワークと小テストを組み合わせることで繰り返しによる基礎の定着がはかれたところがあった。継続していく。</p> <p>授業アンケートによれば、発表・発言や、興味をもったことを自分で調べるといふ、積極的な取組は 5 割前後にとどまる。個々に、自主的な取組を促すような授業展開を工夫する。</p>	<p>第 1 学年では平均正答率が目標値を上回った。課題としていた記述式の問題も目標値を上回っている。今年度は基礎の定着を課題としていたが、来年度は唯一全国平均を下回った活用力の向上が課題である。</p> <p>第 2 学年では教科全体の平均正答率が目標値とほぼ同程度ととらえられるが、活用力よりも基礎力が、また観点の面では知識・技能が目標値を下回っており基礎知識の確実な定着が課題となった。記述が短答よりも目標値を上回ったのは、考察文などの表現指導の成果と考えられる。</p> <p>デジタルドリルの活用と、ワーク・小テストの活用により、基礎基本の向上に効果が見られた。タブレット端末を活用した実験結果の発表等を継続して行うことで、知識の活用力をさらに高めていく。</p>

英語	<p>調第2・3学年ともに、全国の平均正答率を上回っていたが、自治体平均には届かなかった。その中でも、リスニングの正答率は高かった。</p> <p>第2・3学年ともに、書くことについて課題が見られる。第2学年は「3文以上の英作文」、第2学年は「場面に応じて書く英作文」が目標値を下回っていた。今後は、書くことを鍛える活動を増やしたい。</p> <p>正答率分布から、2・3学年において、正答率が80%以上の生徒が4割いる。他方で、正答率50%未満の生徒が全体の2割程度いる。生徒の主体的、協働的な学びを育み、創意工夫した授業展開をし続け、学力の全体的な底上げを図っていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の習慣化、宿題への取組に課題がある。 ・書くことへの苦手意識を取り除き、たくさん練習する機会の提供および添削指導の必要がある。 ・基本的事項(既習事項を含む)を定着させる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回、デジタルドリルや教科書の音読練習、ライティング練習などの宿題を出し、学習の習慣化を図る。 ・少人数授業を行う中で、生徒同士が助け合いながらペア活動や発表の課題に取り組む機会を多く作る。教師は全体を把握しつつ、個別指導にあたる。 ・学期の初めにスペリングコンテストを行い、基本的な単語のつづり(スペリング)の習得を目指す。また、定期的に単元テストを行い、学習内容の定着を図る。 ・デジタル教科書などのICT機器を活用し、音声を繰り返し練習したり、視覚的情報を多く提供することで、理解度の向上を目指す。 	<p>調新宿区学力調査から、第3学年はどの領域でも全国値を上回るかそれと同等であったが、新宿区の値よりはどれも低かった。全国値を上回っているとはいえ、特に、選択式や短答より、記述式の解答の正答率が低かったので、「書くこと」に重点を充てた指導を行っていく必要がある。</p> <p>学家庭学習として、紙のドリルとは別にデジタルドリルの宿題配信を、定期的に行っている。今のところ、紙のドリルとほぼ同程度の取組状況であった。どのような形のものであっても、引き続き、家庭学習の習慣化・定着に努める必要がある。</p> <p>スキット発表では、どの学年もペアで助け合いながら課題に取り組むという活動を設定している。助け合いの様子が多く見られた。</p> <p>帯学習として単語・熟語テストや、単元ごとのテストを行うことで、スモールステップを踏ませている。夏休み明けには、スペリングコンテストを行った。</p>	<p>調新宿区学力調査から、第1・2学年ともに全国値を上回っていたが、新宿区の値よりは低かった。どの学年においても「書くこと」に課題が見られたので、スペリングコンテストやレポート提出の機会を定期的に設け、正確に書けるよう継続して指導を行う。英作文の添削指導については、タブレット端末ソフトを利用した提出を設定するなどの工夫を行う。</p> <p>学どの学年も、授業内の帯学習として単語・熟語テストを行い、基礎基本の確認としている。生徒と教師のインタラクションを大切に授業を展開していること、定期的にスピーキングテストを行っていること、そして少人数授業における定期的なクラス替えを行うことで、多様な学び合いの場を提供している。これらの成果が各種調査のポイントに表れていると考えられるので、引き続き、バランスの良い4技能の定着を目指した授業を模索したい。</p> <p>英検を受検する人数も増え、取得率も上がってきている。</p>
----	--	--	--	---	---

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト、デジタルドリル等から見える学習の状況

※分量は2ページ以上となってもよい。